

五花街紹介

現在、京都花街組合連合会に加盟している花街として、
祇園甲部、宮川町、先斗町、上七軒、祇園東の5つの花街があり、
総称して五花街と呼んでいます。



祇園甲部

四条通を挟んで北は新橋通、南は建仁寺通、西は大和大路通、東は東大路通に囲まれた花街。八坂神社の門前町として栄え、現在でも江戸時代の茶屋建築の面影を残す風情あるまちなみが独特の情緒を形作っている。祇園甲部歌舞練場にて、春に「都をどり」、秋に「温習会」の公演を行う。
京舞井上流



宮川町

鴨川の東側、四条通の南側から五条通までの花街。八坂神社の御輿洗いが行われていたことから宮川という名がついた。江戸時代には出雲阿国の歌舞伎公演が行われ、芝居町や茶屋町として発展し現在に至る。宮川町歌舞練場にて、春に「京おどり」、秋に「みずゑ会」の公演を行う。
若柳流



先斗町

鴨川と木屋町の間、三条から四条に至る通りの花街。その名の由来には、ポルトガル語のポント（「先」の意味）など諸説ある。歌舞練場は三条大橋近くにあり、鴨川からその存在感ある佇まいを眺めることができる。先斗町歌舞練場にて、春に「鴨川をどり」、秋に「水明会」の公演を行う。
尾上流



上七軒

北野天満宮の東、千本釈迦堂の西にある花街。室町時代に、天満宮の造宮に使った残木で七軒の茶屋を作り、参拝客の休憩所とした。その七軒茶屋に豊臣秀吉が茶屋株を公許したのがお茶屋の始まりとも伝えられる。上七軒歌舞練場にて、春に「北野をどり」、秋に「寿会」の公演を行う。
花柳流



祇園東

祇園甲部と同じく八坂神社の門前町として江戸時代から栄えてきた花街。1881年（明治14年）に、四条花見小路北東部（四条通り以北、花見小路以東）が祇園東に区分され現在に至る。歌舞練場である祇園会館にて、秋に「祇園をどり」の公演を行う。
藤間流



芸妓さんや舞妓さんに支えられている舞・をどりなどの伝統伎芸、華やかな美しさを演出するかんざしやきものなどの和装や伝統工芸品、優雅で洗練された所作、お客さんに高い満足をもたらすおもてなし…。「京・花街の文化」には、京都の伝統文化やものづくり、おもてなしの魅力が凝縮されています。京都ならではの文化の価値を市民の皆様と共有し、いきいきと光り輝き続ける花街を誇りにしたいものです。

京都市長

門川 大作



京都をつなぐ無形文化遺産
京・花街の文化

いまでも息づく
伝統伎芸と
おもてなし

京都市

京都市文化市民局文化財保護課

〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町 394 Y・J・Kビル 2階 TEL.075-366-1498

平成26年3月発行 京都市印刷物第254988号



京・花街の文化 ～いまも息づく伝統伎芸とおもてなし～

五花街 ～祇園甲部，宮川町，先斗町，上七軒，祇園東～



花街が継承する伝統伎芸

芸妓や舞妓が日々稽古に励んでいる舞・踊り，長唄，小唄，常磐津，清元，鳴物（小鼓，大鼓，太鼓）などの伝統伎芸。その洗練された伝統伎芸は，「都をどり」（祇園甲部），「京おどり」（宮川町），「鴨川をどり」（先斗町），「北野をどり」（上七軒），「祇園をどり」（祇園東），五花街合同公演といった舞台上で披露されます。

花街のおもてなし

伝統伎芸を披露する歌舞練場をはじめ，座敷でおもてなしするお茶屋，舞妓らが生活しながら花街のしきたりを学ぶ置屋，芸妓と舞妓が芸を磨く稽古場，そして，宴席の料理を提供する料理屋や仕出し屋などが集まり，まち全体が協働して花街のおもてなし文化を支えています。

伝統伎芸とおもてなしの担い手「芸妓」「舞妓」

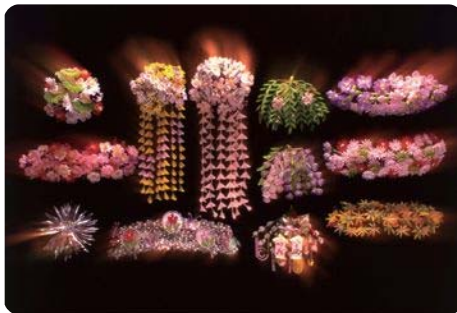
伝統伎芸を受け継いでいくため，芸妓や舞妓は厳しい稽古を積み重ね，座敷のお客からの励ましを糧に，また，各花街の公演や五花街合同公演を一つの目標にしながら，日々，芸に磨きをかけています。

花街に伝わる伝統行事

花街に伝わる「節分・お化け」などの風習，「始業式」などの花街独自の行事，そして，「時代祭」や「祇園祭・花傘巡行」「梅花祭」といった京都の伝統行事への参加など，花街では京都の伝統文化が大切に守り続けられています。

花街を支える「ひと」「わざ」「もの」

芸妓や舞妓を引き立てる髪型やきもの，三味線や笛などの邦楽器，さらに，舞台や座敷を飾るしつらえなどは，京都の文化の中で洗練された匠の技が支えています。同時に，花街における伝統工芸に対する需要は，ものづくり都市・京都の活性化に寄与しています。



選定にあたって

芸妓や舞妓が舞・踊りをはじめとした数々の伝統伎芸により心のこもったおもてなしをする文化が連綿と受け継がれているまち，そして，京都の伝統文化が大切に守り続けられているまち「花街（かがい）」。

現在の京都には，祇園甲部，宮川町，先斗町，上七軒，祇園東の花街（これら五つの花街を総称して「五花街」と呼ばれている。）があり，長い歴史の中で育まれてきた京都の伝統文化の粋（すい）をもって客をもてなす文化を大切に守り続けている。また，かつて六花街の一つに数えられていた島原は，太夫文化を伝えるまちとして独自の存在感を示している。

五花街では，芸妓や舞妓が，春秋の公演を一つの目標にしながら，日々，舞・踊りをはじめとする芸事の習練を積み重ねるとともに，茶道などの伝統文化の習得に励んでいる。そして，彼女らを引き立てるきものなどの装いは，伝統工芸の職人や髪結い師，着付師など，多くの匠のわざによって支えられている。また，始業式など花街独自の行事のみならず，節分のお化けといった風習を継承するとともに，時代祭など京都の伝統行事に参加するなど，京都の伝統文化を大切に守り続けている。

そして，洗練された伝統伎芸を披露する歌舞練場をはじめ，座敷でおもてなしするお茶屋，舞妓らが生活しながら花街のしきたりを学ぶ置屋，芸妓と舞妓が芸を磨く女紅場（にょこうば）などの稽古場，そして，宴席の料理を提供する料理屋や仕出し屋などが集まり，風情あるまちなみを維持しながら，まち全体が協働して花街の文化を育んでいる。

このように，京都の花街には，伝統伎芸をはじめとする伝統文化とおもてなしの文化が凝縮しており，本物へのこだわりを大切にしながら育まれたその華麗で洗練された文化は，日本国内からだけでなく，海外からも高い評価を受けている。

しかしながら，伝統伎芸とおもてなしの担い手である芸妓が年々減少し，また，その愛らしい姿が京都の花街の象徴にもなっている舞妓のなり手不足も危惧されている。さらに，お茶屋や置屋などの減少は，花街のおもてなし文化のあり様に関わる問題である

と同時に，風情あふれるまちなみの維持にとって課題となっている。また，もてなされる側の伝統伎芸に対する理解不足も指摘されているところであり，伝統伎芸などの伝統文化に対する関心の低下は，花街だけでなく京都の文化全体の問題としてとらえる必要がある。

こうした現状を踏まえ，京都の文化の一翼を担ってきた花街の価値を見つめ直し，花街の文化を継承していくことの大切さを再認識するとともに，その魅力を内外に発信するため，「京・花街の文化～いまも息づく伝統伎芸とおもてなし」を，“京都をつなぐ無形文化遺産”に選定する。

平成 26 年 3 月

～京の花街～



もう一つの花街 ～島原～

伝統建築

揚屋であった角屋の建物は，揚屋建築唯一の遺構として，国の重要文化財に指定されています。また，置屋の輪違屋は京都市指定文化財，東の玄関であった島原大門は京都市登録文化財です。

伝統行事

禿（かむる）や引船（ひきぶね）などの付人を連れて着飾った太夫が優雅に練り歩く「太夫道中」や太夫をお客に紹介する「かしの式」など，独自の文化を継承しています。

島原文化を支える「太夫」

島原の「太夫」は，官許により宴席でおもてなしをする女性の最高位として，歌舞音曲，茶道，華道のほか，和歌や俳諧などにも長けていました。



当初は二条柳馬場に開かれ，その後六条三筋町に移転し，さらに 1641 年に現在の地に移された島原。急な移転騒動が，当時の島原の乱に似ていたことから，そう呼ばれたとも言われています。島原は，遊宴だけでなく，和歌や俳諧などの文芸活動が盛んで，江戸中期には島原俳壇が形成されるほどの活況を呈していました。かつては，歌舞練場で「青柳踊」などが上演され，京都の六花街の一つに数えられていました。現在は輪違屋のみお茶屋営業を続けており，元揚屋の角屋は「角屋もてなしの文化美術館」として島原文化を現在に伝えています。